論　文　要　旨

氏　名	坂田　彩香
タイトル （日英併記）	Functional, quality of life, and food intake evaluation of treatment with or without second molar implant: A prospective cohort study. （片側遊離端欠損に対する第一大臼歯部までのインプラント治療が口腔機能，口腔関連QoLおよび摂取食物に及ぼす影響：前向きコホート研究）

論文の要旨

2歯以上の片側遊離端欠損に対するインプラント治療において，第二大臼歯部までのインプラント治療の必要性については未だ議論の余地がある．本研究の目的は，第一大臼歯部までのインプラント治療と第二大臼歯部までのインプラント治療の効果を咬合力，咀嚼機能，口腔関連QoLおよび摂取食物量の観点から比較し，インプラント治療計画の立案に有用な知見を得ることである．

本研究は前向きコホート研究として実施された．2021年7月から2024年9月までの間に九州歯科大学附属病院口腔インプラント科において，片側遊離端欠損に対してインプラント治療を行った32名の患者（男性9名，女性23名，年齢中央値62[57 - 69.5]歳）を対象とした．第一大臼歯部までインプラント治療を行った患者16名をShort群（S群），第二大臼歯部までインプラント治療を行った患者16名をNormal群（N群）とした．インプラント治療は，通常荷重プロトコールに従って実施した．インプラント埋入から約2ヵ月後，プロビジョナルレストレーションを装着し，機能および清掃性に問題がないことを確認後，スクリュー固定式の最終上部構造を装着した．アウトカムとして咬合力，咀嚼機能，口腔関連QoL，摂取食物および摂取栄養素を評価した．治療前のベースライン評価はインプラント埋入前に実施し，治療後の評価は最終上部構造装着から1ヵ月以上経過後に行った．咬合力はデンタルプレスケールⅡを用い，咀嚼機能はグルコセンサーGS-ⅡNを用いて測定した．口腔関連QoLの評価はOral Health Impact Profile（OHIP）の日本語短縮版であるOHIP-J14を使用し，摂取食物および摂取栄養素は自記式食事歴法質問票（BDHQ）を用いて評価した．統計解析には，S群およびN群の比較にMann-Whitney *U*検定，ベースラインと治療後のデータの比較にWilcoxon符号順位検定，分割表の解析にカイ二乗検定を用い，有意水準を$\alpha=0.05$とした．

両群ともインプラント治療により咬合力と咀嚼機能が改善したが，その変化量はN群で有意に大きかった．両群とも口腔関連QoLは向上し，その変化量は両群間で同等であった．さらに，野菜の摂取の増加量はN群で大きく，野菜に多く含まれる栄養素の摂取量を比較したところ，食物繊維およびビタミンKの摂取の増加量はN群で大きかった．

以上の結果から，片側遊離端欠損における第一大臼歯部までのインプラント治療と第二大臼歯部までのインプラント治療を比較すると，口腔関連QoLの改善は同等であったが，第二大臼歯部までのインプラント治療は咬合力，咀嚼機能，野菜の摂取量および関連する栄養素の摂取量において，より優れた改善効果を示す可能性が示唆された．